

《論文》

PA（プロジェクトアドベンチャー）の発生と発展の要因

—今後の課題に向けた一考察—

椎名 純代

The History of Development of Project Adventure

A Study of current issues in Practice of Project Adventure

Sumiyo SHIINA

キーワード：プロジェクトアドベンチャー，アウトワードバウンド，ファシリテーション，ファシリテーター，冒険教育

Key Words: Project Adventure, Outward Bound, Facilitation, Facilitator, Adventure-Based Learning

1. はじめに

2013年，中央教育審議会は都市化・過疎化・グローバル化・少子化といった社会の変化に伴い，青少年の「社会を生き抜く力」の養成の必要性を挙げ，社会で求められるコミュニケーション能力，自立心，主体性，協調性，チャレンジ精神，責任感，創造力，変化に対応する力，異なる他者と協働したりする能力等を育むために体験活動が不可欠であるとしている¹⁾。

この答申でいう体験活動とは，「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として，体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」としており，冒険という体験を通じて個人やグループの成長を促す体験活動のひとつとして，Project Adventure（以下，PA）がある。

この手法は，Kurt Hahnが築いたアウトワー

ド・バウンド（Outward Bound）プログラムを学校教育として取り入れられるようにと1970年代にアメリカで開発された。機関としてのProject Adventureは，アメリカの学校現場に冒険教育を導入・普及するにあたり，中心的役割を果たした。日本でも1995年に株式会社プロジェクトアドベンチャー・ジャパンが設立され，小・中・高校・大学といった教育機関，企業，スポーツチーム，医療，矯正施設，保育，特別支援やトラウマケアと様々な対象・領域へ，その手法や考え方を広めている²⁾。体験学習・体験活動の手法は他にもあるにも関わらず，なぜPAは国内外で多くの教育機関をはじめとする様々な分野で採用されているのか。

本稿では，その理由を再考すべく，PAの起源，発展の経緯を多角的に考察していく。

2. アウトワード・バウンド・スクール (OBS) について

アウトワード・バウンド・スクール (Outward Bound School, 以下 OBS) を設立したクルト・ハーン (Kurt Hahn) は、1920年にドイツでセーラム・スクール (Salem School) を設立、1934年にはスコットランドにゴードンストーン・スクール (Gordonstoun School) を設立した。青少年の高等教育として、クライミング、カヌー、セーリング、山歩きなど屋外での非競争性の身体活動と民主主義的な社会協力を重点を置いた教育カリキュラムを実践しており、Gordonstoun Schoolでは、それらに加えバッジスキームと呼ばれるカリキュラムを開始、瞬く間にイギリスで最も著名な先進的学校として、世界各国にモデル校が展開されるようになった³⁾。

第二次世界大戦中の1941年には、ウェールズに、第一号となるOBSを設立。そののはじまりは、戦時中に船乗りが生き残るためのトレーニングであった。ある時クルト・ハーンは、イギリスのある海運会社の社長から、ドイツ軍の攻撃で多くの船と船乗りを失ってしまったこと。そして、生き残った船乗りもいたが、若い船乗りよりも体力的に劣る年配の船乗りの生存率が高かったことを聞いた。クルトは、若い船乗りたちが危機的な状況に直面した時に、年配の船乗りたちのように、強い気持ちと確かな経験を持ち、自分と仲間の命を守りながら、北大西洋を生き抜くことができるようトレーニングをするためOBSを立ち上げたと言われている⁴⁾。

“Outward Bound”の元々の意味は、航海用語で出航の24時間前に掲げられる旗のことである。人生という航海へ旅立つ若者の自己発見や逆境に打ち勝つ力を養うため、時に過酷とも言

えるような自然の中で数週間から数ヶ月の活動を基本とする冒険教育の手法のベースには、「モラルある善き市民」になるための大切な力を育てるという学校の理念と、下記のようなクルト・ハーンのエデュケーション哲学に基づいていた⁵⁾。

- 「・Your disability is your opportunity (あなたの障害があなたのチャンス)
- ・学生は、成功と同じくらいの失敗を経験すること
- ・学生は、自分の中にあるネガティブな傾向を克服し、逆境に打ち勝つこと
- ・学生は、自身の欲求よりもコミュニティーのためになるよう規律を学ぶこと
- ・学生は、自身の体験を通じて自己発見と奉仕との関係性を認識すること
- ・真の学びは、直接的なアクティビティと同様、ある一定期間の静けさと孤独を要する」

戦後は、青少年を対象とした野外体験型の冒険教育プログラムとして世界中へ広まり、現在は、世界33カ国約220の拠点に広がっている。

3. プロジェクト・アドベンチャー(PA)のはじまり

1971年、アメリカのマサチューセッツ州にあるハミルトン・ウィンハム高校 (Hamilton-Wenham Regional High School) の校長だったジェローム・ペイ (Jerome Pieh) は、父親がミネソタでOBSを立ち上げる手伝いをしており、そのプログラムに馴染みがあった。同校のカリキュラムコーディネーターであったゲイリー・ベーカーと共にOBSを公立高校で使えないかと作った企画書が、プロジェクト・アドベンチャーの始まりとなった⁶⁾。

連邦教育局からの補助金を得て、OBSで教員研修プログラムコーディネーターをしていたボブ・レンツ（Bob Lentz）、OBSの教師経験者のカール・ロンキ（Karl Rohnke）、心理学者のジム・ショーエル（Jim Schoel）を含む“PAスタッフ”と呼ばれた専門スタッフ数名と現場の教員もOBSの教育目的と手法をベースに、以下の教育目標とテストプログラムを作成した⁷⁾。

「1. 参加者の自信の向上

2. グループ内の相互信頼の向上
3. 巧緻性（アジリティ）や身体的協調性（コーディネーション）の向上
4. 他者と一緒にいる喜びの向上」

当初、3年間の初等中等教育法のタイトルⅢ（学校改善と教育の質的向上を目的に革新的教育プログラムの開発を援助する）連邦補助金交付を受けて着手されたプロジェクトであり、高校生の体育の授業のカリキュラムとして開始された。

1971年から1973年に渡り、PA型体育授業に参加した計455人の高校1年生への調査の結果、自己概念（Tennessee Self-Concept Scaleによる）、内的統制（Rotter Scale of International External Controlによる）、そして体力テスト（12分間走、50ヤード走、300ヤード走、シットアップ、懸垂による）の結果も有意に向上しており、保護者の感想からも生徒の自信が高まったとの報告があった^{8) 9)}。また特に女子の自己概念や達成要求に好ましい影響が出ている¹⁰⁾。

この評価を受けて、交付3年目となる1973年に、連邦教育局から革新的なプログラムとして“全国ベースセッター賞”を受賞、全米普及ネットワークから“デモンストレーター・デベ

ロッパー（実演者・開発者）”プログラム（モデルプログラム）として認定された。

4. PA発展の要因

PAが一高校の体育カリキュラムから広く普及した要因として、教育政策によるもの、カリキュラムの特徴、関わった教員たちに起こった副次的変化など様々な背景が考えられる。

（1）全米普及ネットワーク（National Diffusion Network: 以下、NDN）による普及

1974年、NDNに模範的なプログラムとして認定されたPAは、そのプログラムを他校が学べるよう、利用可能なカリキュラム、研修、プログラムで使用する他の教材の作成などを準備することが義務付けられた¹¹⁾。NDNの強力な後押しもあり、1976年ごろまでには、マサチューセッツ州の30以上の学校、その他ニューハンプシャー州、バーモント州、コネチカット州、ウィスコンシン州、ミゾーリ州、オレゴン州、モンタナ州などの約100校がこのプログラムを実施するようになった。1982年には、5,000人以上の教育関係者がPAスタッフによる4日間の集中カリキュラムワークショップを受講した¹²⁾。

またNDNは、学校だけでなく、すべての教育的なプログラム（キャンプ、青少年センター、診療所、他教育機能のある場所）へのPA普及を働きかけた。

ハミルトン・ウィンハム高校でのカリキュラムの中、発展を続けてきた援助を必要とする生徒に対する取り組みは、1979年に最初のアドベンチャーベースドカウンセリング（Adventure-Based Counseling: 以下、ABC）講習会を開催す

るに至り、スクールカウンセラー、心理学者、治療を目的としたセラピューティックキャンプや薬物治療の施設などの関係者が参加した¹³⁾。

こうして学校での教育以外にも“治療”として他分野への発展も急速に広まり、現在も4,000ヶ所を越える学校やサマーキャンプなどで活用されている¹⁴⁾。

(2) “冒険”を学校に

当時、他にもOBSを学校環境で活用しようという試みがあった中で、ハミルトン・ウィンハム高校でのカリキュラム改革がこのような大成功を収めたのには、冒険がもたらす様々な体験・気づき・成長の機会を公立の学校環境の中で提供できるようにしたことがある。

OBSのプログラムは、厳しい自然環境下で数週間にわたって行われる、心身ともに高度な挑戦活動であるため、地理的・予算的・日程的に参加できる層が限られてしまっていた。そこで、ハミルトン・ウィンハム高校のカリキュラム作りに携わったOBS出身メンバーたちは、冒険がもたらす機会を提供するため、「ロープスコース」を活用し、自己の限界を越えるような危険負担への挑戦を促す身体活動を再現した。

そしてロープスコースというハード面だけでなく、児童たちが心の安全を感じながらそれぞれの挑戦ができるよう、“チャレンジ・バイ・チョイス (Challenge by Choice)”と“フルバリュー・コントラクト (Full Value Contract)”の考え方をういたプログラムが実践された。

“チャレンジ・バイ・チョイス”とは、自分の参加の度合いと方法を自分自身で決められるという考え方で、ハミルトン・ウィンハム高校のプログラムに当初から関わったPAスタッフ

のカール・ロンキによってつくられた¹⁵⁾。今では多くの冒険教育の原則になっているだけでなく、野外や冒険プログラムにおける標準運用手順にもなっている¹⁶⁾。これによって、参加者は無理をしたり、強制されることなく自分で自分の挑戦を選択することができる。そしてその選択が仲間に尊重されることが前提となるように、“フルバリュー・コントラクト”がある。“フルバリュー・コントラクト”とは、グループを守るためにメンバーが交わす約束ごとである¹⁷⁾。参加者が安心安全に参加できる場を作るために、個人とグループを最大限（フル）に尊重する（バリュー）ことを約束するのである。

Webster (1978) は、PAがもたらす教育的効果を次のように分析している。

「1. 冒険性

自分がどうなってしまうのかわからないような不安な状況に直面することで感情が揺さぶられると同時に、体験に没頭し、ダイナミックな学びのプロセスが生まれる。

2. 協力性

個人では達成できないゴール達成へのプロセスで、グループが個々の尽力を認め合い、サポートした時に、互いを認め合い、尊重しあい、個性を活かし合うといったことが起こる。

3. 直接体験

授業での教材による学びを直接的かつ具体的にできる。

4. パーソナリティの統合

身体的、感情的、社会的、知的、そして時には美的なパーソナリティが統合される機会を提供する教育である。」

冒険の要素を抽出し、ハードとソフトの面からその要素を学校教育に融合させることで、子

どもたちに体育の授業としての身体的な教育効果のみならず、全人教育の成果を挙げたことが発展の理由の一つであると考える。

（３）成長するプロセスの発生

藤岡（2005）は、ハミルトン・ウィンハム高校でのカリキュラム改革が成功した理由として、教師たちに起こった変化を挙げている。「第１に校長の教育理念に各教師の教育意欲が喚起され、教師たちの課題として共有されたこと、第２にOBS経験者を中心としたPAスタッフという人的資源も教師たちの意欲喚起につながったこと。そして最も大きな要因は、カリキュラム改善のプロセスで、生徒へアドベンチャー経験を通じて意識改革の機会を提供しようという教師自身の教育活動が、同時に教師にとっての意識改革と専門性向上の契機を内在させていた。」と述べ、PAの取り組みの意義を「教職員が教育プログラムを共同創造するプロセス」にあったとしている。PA開始から６年後にボブ・レンツらがハミルトン・ウィンハム校へ訪問した時の教師の発言からもそれが窺える。教師にとっての取り組みの意味として、「私にとって実にアドベンチャーだった。私は成長した。そしてたくさんのことを学んだ。」「PAの成功は、私たちが自らの課題に取り組むことにあると思う。」と語ったという¹⁹⁾。

校長だったジェローム・ペイの熱意に加え、PAスタッフとボブ・レンツがファシリテーターの役割を果たし、教師たちが学校のプログラムを創り出す主体者となること、教師たち自らの課題に挑戦することをエンパワーしたと考えられる。子どもとともに教師がチャレンジし、共に成長するこのプロセスの発生がカリキュラム改革を成功へ導いたと言える。

この学びと成長のサイクルによる教師たちへの変化は、日本の宮城県教育委員会が独自に行っているPAの手法を取り入れた教育活動MAP（みやぎアドベンチャープログラム）でも報告されている²⁰⁾。岩永他（2007）が宮城県教育委員会の各担当者へ行ったPAの効果についての発話の中で、「一番変わったのは、いろんな講習会をやって、先生方なんです。」「生徒自身を変えてるようにして実は我々教職員というか、指導者の意識改革をしているのではないかと思います。」と教職員自身の変容を示す内容が見られている。

５．発展のプロセスで生まれたPA実践における課題

PAが急速に全米へ普及したプロセスで、プログラムがパッケージ化されたことに伴い、プログラムの実践におけるいくつかの重要な変化が起こった。

第１に、冒険性の希釈化である。PAは歴史の変遷を経て、元々OBSが追求していた厳しい自然環境下での体験や逆境への挑戦といったテーマから離れ、人工的な環境設定によるアクティビティやキット商品を活用し、情緒的・認知的な“冒険”が主となっていった。例えば、PAをはじめとするアドベンチャー教育では、「慣れている」「既知である」といった精神的に安心安全な範囲を“コンフォートゾーン”と呼び、その範囲を超えて未知の状況にチャレンジすることを“冒険（アドベンチャー）”と捉えている²²⁾。岩永他（2007）は、宮城県がPAを公立の全学校で実践しようという試みを「注目し値する事柄」としつつも、そのような動きが他に拡がりを見せない理由として、「汎

用性の高い、誰でも使える一連のパッケージ化されたプログラムは、いつしか源流としてのOBSや初期のPAが有していた“冒険”という要素を限りなく希釈化していたのではないか。」と指摘している。

第2に、オリジナルのプログラムで検証されたような質の高い体験の担保である。ディック・プラウティ(Dick Prouty, 前PA代表)も、「ハミルトン・ウェンハム高校のオリジナルのプログラムは、大きく複雑な試みだった。ほとんどの学校における採用はこれまでそのレベルに達していない。」と言ったというように¹⁹⁾、教職員が試行錯誤しながら教育プログラムを作成するという、関係者がそのプロセスそのものに意義を見出していたオリジナルのプログラムは、教材・ノウハウ・キットなどが販売されることで、その多くは簡略化された。藤岡(2005)は、「プログラム採用数の議論だけでなく、採用による質的改善の実態が検討されなければならないだろう。」と指摘している。

6. 考察および今後の課題

クルト・ハーンにより、戦時中の北大西洋で若い船乗りが、爆撃の中生き残る術を教えるために始まったOBSに端を発し、一高校の体育カリキュラムから発展したPAは、約50年後、VUCAとも呼ばれる先行きが不透明な社会の様々な分野で取り入れられている。熱意ある教育者たちによって時代に合わせて引き継がれてきた冒険教育の教えは、PAとして、ハミルトン・ウェンハム高校や宮城県のMAPなど様々な場でパワフルな学びと成長のプロセスを生んだ。

一方、PAは急速に広がるニーズに応えよう

とする過程で、本質の追求vs普及のジレンマからプログラムのパッケージ化により冒険の希釈化、プログラムの質の担保といった課題が浮かび上がってきた。今後、果たして“ロープスコースを使わず、室内でアクティビティをしているだけでもPAなのか”、“何をしたらPAと言えるのか”といった実践におけるPAプログラムの新たな概念化が必要になるであろう。

そしてプログラムの質は、実践するファシリテーターに影響を受けると考えられることから、PAファシリテーターの概念化も必要になるものとする。

本間(2004)はPA矯正施設への導入を想定するにあたり、「PAは、知識を直接与えるためではなく、体験を通じて気付かせることを手法としている。この“気づき”を生み出すためには、慈愛の精神、多くの忍耐、寛容さが必要であり、形式的要件を満たすだけでは十分にその効果を得ることができない。」と知識や能力だけでなく、素養の大切さも述べている。

数々の書籍や研究によりPAプログラムの理論、実践報告、効果研究からその形式知は伝えられているものの、PAの実践者(ファシリテーター)に必要な要件、またその育成・養成方法について言及された文献はほぼ見当たらない。その理由の一つとして、理論ではなく体験から生まれたPAの実践のためには、PAにおける暗黙知を、体験を通じていかに身につけるかが鍵になるためと推測する。形式的なファシリテーター育成では、新たなプログラムのパッケージ化の問題を引き起こしかねない。

今後もPAが様々な分野で高い効果を十分に発揮するために、PAプログラムの概念化と併せて、PA実践者(ファシリテーター)の概念化、そして体験から学ぶ環境づくりを通じて実

践者を養成することが必要と考える。

【参考文献】

- 1) 中央教育審議会：今後の青少年の体験活動の推進について（答申）https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/04/03/1330231_01.pdf 最終確認日：2021年11月4日。
- 2) 株式会社プロジェクトアドベンチャージャパンからの情報提供：2021年11月3日。
- 3) James T: Kurt Hahn and the Aims of Education. *Journal of Experiential Education*, 13 (1): 6-13,1990.
- 4) 公益財団法人日本アウトワード・バウンド協会ホームページ。 <https://obs-japan.org> 最終確認日：2021年12月2日。
- 5) Veevers N, Allison P: Kurt Hahn Inspirational, Visionary, Outdoor and Experiential Educator. Sense Publishers: Rotterdam., pp19-21, 2011.
- 6) ジム・ショーエル, リチャード S. メイゼル (著) 坂本昭裕 (監修) プロジェクトアドベンチャージャパン (訳)：グループの中に癒しと成長の場をつくる－葛藤を抱える青少年のためのアドベンチャーベースドカウンセリング。株式会社みくに出版：東京, p.33, 2017.
- 7) Rohnke K: Project Adventure a widely used generic product, *Journal of Physical Education, Recreation and Dance*, May-June: 68-69, 1986.
- 8) ジム・ショーエル, リチャード S. メイゼル (著) 坂本昭裕 (監修) プロジェクトアドベンチャージャパン (訳)：グループの中に癒しと成長の場をつくる－葛藤を抱える青少年のためのアドベンチャーベースドカウンセリング。株式会社みくに出版：東京, p.34, 2017.
- 9) Fersch E, Smith M: Final Quantitative Evaluation for 1971-1972 YearI. *Project Adventure*: Hamilton Mass., 1978 (ED173059)
- 10) Fersch E, Smith M: Final Quantitative Evaluation for 1972-1973 YearII. *Project Adventure*: Hamilton Mass., 1978 (ED173060)
- 11) 井村仁, 遠藤浩：プロジェクト・アドベンチャーとその効果に関する文献研究, 筑波大学体育科学系運動学類運動学研究, 5：1-9, 1989.
- 12) Schoel J, Prouty D, Radcliffe P: *Islands of Healing* A Guide to Adventure Based Counseling. Project Adventure Inc., U.S.A., p7, 1988.
- 13) ジム・ショーエル, リチャード S. メイゼル (著) 坂本昭裕 (監修) プロジェクトアドベンチャージャパン (訳)：グループの中に癒しと成長の場をつくる－葛藤を抱える青少年のためのアドベンチャーベースドカウンセリング。株式会社みくに出版：東京, p.35, 2017.
- 14) 林寿夫：学校教育のシステムの中で「冒険」を活かすープロジェクト・アドベンチャー・プログラムの概要, *学習評価研究*, 25: 152-159, 1996.
- 15) Schoel J, Prouty D, Radcliffe P: *Islands of Healing* A Guide to Adventure Based Counseling. Project Adventure Inc., U.S.A., p131, 1988.
- 16) Lissen B: Is There Choice in Challenge by Choice?, *The Ontario Journal of Outdoor Education*, 12 (4): 20-21, 2000.
- 17) Schoel J, Prouty D, Radcliffe P: *Islands of Healing* A Guide to Adventure Based Counseling. Project Adventure Inc., U.S.A., pp94-95, 1988.
- 18) Webster E S: *Project Adventure A Trip into the Unknown*, *Journal of Physical Education & Recreation*, 49 (4): 39-41, 1978.
- 19) 藤岡恭子：アメリカにおけるアドベンチャー・プログラムの普及過程とその質的変容—1970年代プロジェクト・アドベンチャーの誕生と展開を中心に—, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 52 (2): 69-78, 2005
- 20) 小林正道, 丸山富雄：MAP (みやぎアドベンチャープログラム) の導入とその課題に関する研究—実施前年における小・中・高等学校の活動状況について—, 仙台スポーツ科学研究科研究論文集, 3: 7-14, 2002.
- 21) Nadler R, Luckner J: *Processing The Adventure Experience: Theory and Practice*. Kendall/Hunt Publishing Company: Dubuque, Iowa, pp.59-64, 1997.
- 22) 岩永定, 柏木智子, 藤本恭子, ほか：宮城県におけるプロジェクト・アドベンチャーの取り組みと課題, 鳴門教育大学研究紀要, 22: 37-50, 2007.
- 23) 本間信哉：グループ・ワークPA (Project Adventure) = プロジェクト・アドベンチャー, *刑政*, 115 (5): 68-74, 2004.